

**日本文芸研究ゼミナール(6)c : 俳諧 : 『奥の細道』の研究(ゼミナール選抜の手引き : 学習の方法)**

著者	渡邊 慶人, 島本 昌一
雑誌名	日本文學誌要
巻	56
ページ	113-114
発行年	1997-07-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019972">http://hdl.handle.net/10114/00019972</a>

た。ここでは大学院生のご指導もあり、共に能を学ぶ者どうしの交流を深めました。

十一月には国立能楽堂で『采女』を鑑賞しました。実際に能に触れることによって、より実感をもって研究に臨むための参考になったはずです。

法政大学には世界に誇ることができる高レベルの能楽研究所があり、私たちの学習の助けとなっています。これらの機会や施設を活用すれば、思う存分満足の研究が可能となるはずです。

私たちのゼミは、先生と一緒に飲みにゆくなど、とてもなごやかな楽しい雰囲気です。能に興味のある方は私たちのゼミに顔を出してみてください。きっと何かを感じることができると思います。

『世阿弥は天才である』 草思社

三宅晶子

『謡曲百選(上)(下)』その詩とドラマ』 笠間書院 里井陸郎

担当教員 西野 春雄 先生

日本文芸研究ゼミナール(6) c

### 俳諧——『奥の細道』の研究——

委員 三年 渡邊 慶人

私たちのゼミナールでは、松尾芭蕉についての研究を主としています。今年になって、『奥の細道』の直筆本が発見され、学会はもちろんのこと、私たちのゼミナールも大変盛り上がっています。芭蕉について、既に研究し尽くされているのではないかと考えていた私たちも、これから芭蕉について研究してみようと思っている人々も、全く同じスタートラインからの出発なのです。それは、直筆本が発見により、自分が研究すればする程、新しい発見がある、こういった未知の可能性を持った領域だからです。私たちは、芭蕉についても、俳句についても、思い切って深めたいと思っています。

ゼミナールの通常の授業は、数人で班を形成し、その班での調査、研究を深めていきます。その後、発表をしてもらい、それについて全員で考察し、討論していくといった流れになっています。なお、共同研究を重視していますが、私たちは、二年間で独立できる学力をつけたいと思っています。

今年度のゼミナールテーマ

一 奥の細道直筆本の発見——問題の確認

二 冒頭より関東平野の旅——旅について

三 白河関より仙台へ——仙台藩、大淀三千風、芭蕉の風雅観の相違について

四 壺碑より平泉へ——歴史と自然の発見

五 奥羽横断——地方の人々との交歓・連句

六 日本海側にて——芸術論の芽生え、旅行記の構想

参考文献 (書名、著者、出版社)

一 『連句入門』 東明雅 中公新書

二 『芭蕉の世界』 尾形仿 講談社学

術文庫

三 『芭蕉年譜大成』 今栄蔵 角川書店

担当教員 島本 昌一 先生

日本文芸研究ゼミナール(7)c

雨月物語と西鶴浮世草子

委員 三年 小野寺紀子

土屋真由美

このゼミでは、近世文芸——江戸時代の文学や芸能について学んでいます。「近世」という時代は様々なジャンルの文芸が多面的に開花した時代です。文学作品を読み込んでみたい人、江戸時代の生活や風俗に興味のある人、演劇に関心のある人など、どんな人にも幅広くその関心に応えてくれるというのがこのゼミの特色ではないかと思えます。さらにいえば、お金にまつわる話がとても多いというのもこの時代の特色でしょうか。というわ

けで、特定の一作品や作者に固定することなく、毎年取り上げる作品は変わりますが、今年の前期は上田秋成の『雨月物語』から「菊花の約」を読んでいます。後期は井原西鶴の浮世草子の予定です。

ゼミの形式は、二〜三人のグループごとに担当を決めて担当箇所のレジュメ（語注・関係資料など）を作成して発表します。また担当者は問題点を幾つか列挙し、それについて全員で話し合うという形をとっています。このように一つの作品を詳細に読み、複数の人の目から検討することによって、今まで気付かなかったような作品の世界を開いていくこと、それを通して自分の先入観を揺さぶられることがゼミの意義でもあると思います。

ゼミは、自分たちの意向によってマネジメントできる時間であり、四年生になって卒業論文を書くための講座であり、日本文学科の人にとっては最も重要な授業ですので、積極的に参加して、大学らしさをおおいに満喫してください。

参考文献

『日本の古典』 岩波新書

担当教員 日暮 聖 先生

日本文芸研究ゼミナール(8)d  
近現代文学

委員 三年

浅間 理奈  
橋谷友里江

各々が取り上げたい作品、作家を年度の一番始めのゼミで決める。今年は大宰治『斜陽』、北杜夫『夜と霧の隅で』、三島由紀夫『午後の曳航』、大岡昇平『野火』、大江健三郎『新しい人よ目覚めよ』、『セブンティーン』、武田泰淳（作品未定）、遠藤周作『深い河』『沈黙』、島尾敏雄（作品未定）を研究、発表することになっている。一作品をおよそ二回のゼミで討論していく。レジュメは、その作品の構成や作中人物、モチーフなどを検討し作家論にまでおよぶ。少人数でゼミを行って

いるため、活発な討議とまでは言えないが発表者とは違った視点からの解釈や反